

## コーディネーターとしての事業に対する意見シート

■事業名：尾鷲ツーディウォーク事業

■コーディネーター氏名・所属：吉島隆子（特活）コミュニティ・シンクタンク「評価みえ」

■ふりかえり会議開催年月日：平成17年6月7日 13:30～15:30

### 1. 協働のプロセスについて意見

協働のプロセスについては、市行政側が市民に「尾鷲の山歩きに詳しい、道づくりの作業もできる人たち」という専門性を求めたため、対象が限定されたが、内容からいってやむを得ないことであった。結果としては、お互いに「できること、できないこと」を認識し、協働することによって得られる最大効果を想定し、双方がそれぞれに役割分担する中で少人数ながらフル回転して行っている。ただ、実行委員会型の協働の場合、お互いに協働についての認識を理解し、自覚していないと、目先の事業を実施することに意識が集中してしまい、そもそもなぜ協働するのかという本来の目的を見失ってしまうことになりかねない。プロセスについては、市民側の「尾鷲市と協働しているという認識はない」という発言が今後の課題であろう。

### 2. 成果についての意見

初年度の取り組みとしては、行政側、市民側とも双方が持てる力を発揮し、所期の目的を達成したことがふりかえり会議の席でも伝わってきた。元々、市行政側にとって地域の人たちと顔を合わせる機会は多く、市民側の主だったメンバーを知っており、信頼関係にあったことが本事業成功の重要な要素・鍵となっている。協働を行う環境整備については、行政側、市民側双方ともに重要な要素である。市と市民の信頼関係は行政側担当者に人を得たことが大きいですが、担当者が交代しても大丈夫なように市役所全体としての協働への理解が望まれる。市と県民局の関係も、よりよい協働をめざして関係者のさらなる努力を臨みたい。市民側にも協働への一層の理解を期待したい。

### 3. 課題・改善の整理とまとめ

事業経費、参加者については、今後の継続性にもかかわる。まったく同じ規模・内容の事業はできないかもしれないが、初年度の事業で得た運営ノウハウを活かし、今後の計画を立案していただきたい。今後の継続については「人集めと組織」が課題であることを自覚している。また、将来に伝えていくために子どもの参加が少なかったという反省も市担当者であり、早い時期からの学校行事との日程調整などの課題も把握されている。今後、具体的計画に反映されていくものと思われる。

「ウォーキングコースの道中も長く、山の中なので、危機管理体制への十二分な対応

ができるところまでに至らなかった」と市民側関係者が述懐しており、今後の危機管理体制への備えは課題の1つとなっている。他に「初めてのことで未経験な部分があり、仕方がない部分もあった」という反省の言葉も聞かれており、内部で反省会の結果、いくつかの課題も把握できているようなので、改善策がどう講じられるか、今後に期待したい。その際、参加者の声をアンケートでとるなど、さらなる改善をめざしていただきたい。

ふりかえり会議の中でむしろ課題としてクローズアップされたのは、市当局と県関係部署との連携である。今後、必要に応じて、よりスムーズな連携ができるよう、県関係部署とのより密接な関係が望まれる。同時に市役所内部でも担当者しか動かないという組織の縦割りの現状もあるようなので、内部での組織連携、協働意識の醸成も必要と思われる。

#### 4. 事業全体についての意見・感想(自由に記入してください)

「ふりかえり会議」とはどのようなものであるかという意味が県民局担当者から関係者に周知されておらず、協働事業チェックリストの使い方、記入についての説明もなされていなかったと思われる。ふりかえり会議当日だけでなく、事前のチェックリスト記入に際しても、その意味するところが説明されていなかったため、当初の話し合いがかみあわず、参加者全員が「ふりかえり会議」について共有するまで時間を要した。

昨年も同様の意見を書いているが、基本である「ふりかえり会議」の意味、位置づけについて、県民局担当者の意識向上が望まれる。

## コーディネーターとしての事業に対する意見シート

■事業名: おわせ海・山ツーデイウォーク実行委員会

■コーディネーター氏名・所属: 岡嶋多華夫(みえ市民活動ボランティアセンター所属)

■ふりかえり会議開催年月日:平成 17 年 6 月 7 日

### 1. 協働のプロセスについて意見

お互いに「やろう」と言いはじめた出発点では、呼びかけた行政側とテンマウンテンの会との想いが一致しており、それぞれの得意分野をいかして、密に連絡を取り合っていた。活動の広がり方も、テンマウンテンの会のメンバーから自発的に他団体へと多方面に広がっており、それぞれの持ち味を活かした連携をしていることがよくわかった。

行政も相手に任せっきりでなく、共に考え、共に行動・作業をしており、事業を二人三脚で進めているという一体感を感じた。

### 2. 成果についての意見

今回の事業を機に、日本ウォーキング協会公認コースとなり、地域振興の糸口をつかんだことは言うまでもないが、重要なことは、関わった団体が今後も自主的に関わってくれるような関係が作りあげられているか、である。

その点においても、出発点から両者が意気投合しており、連携を密にとり、共に進行しているため、この事業の成果を共に「良かった」と口を揃えて言っていたこともうなずける。

一方で、地域住民のみなさんを巻き込むことがあまりできていなかった事を両者とも気にしており、これからの課題として挙げていた。

### 3. 課題・改善の整理とまとめ

「今後について」の話しになると、行政側は「より広げて住民参加を促したい」という意向だが、テンマウンテンの会は「自分たちの団体趣旨を今後もマイペースに貫きたい」という意向で、今後の取り組み姿勢が少し異なるようだ。

具体的な改善策までは引き出せなかったが、今までの行政と市民活動団体のつながりを重視するだけでなく、今後は市民活動団体同士のつながりや連携をもっと密にしていく工夫や仕掛けをしていくことが、やりっぱなしのイベントに終わらない、事業提案者である行政側の次の一手ではないだろうか、と感じた。

### 4. 事業全体についての意見・感想(自由に記入してください)

どうやったら市民を巻き込むことができるのだろうか? ではなく、どうすれば市民が主体となって自発的に主催していけるようになるか? というように仕掛けていかなければ、持続可能な循環型事業にはならない。

今回のような良い例はどんどん共有して、何がよかったから上手いだったのか、といった「上手いくコツ」としてまとめていくと、何をすればよいのか、自ずと見えてくるものがあるはずである。「ふりかえり」だけではなく、「どうすれば主体的になるか」という視点で、住民の皆さんの意見だけで計画づくり(夢づくり)できる場を仕掛ける必要性を感じた。